

## 世界一のクリスマスツリー

# 狂騒曲 被災地・神戸 「鎮魂」を大義名分にした「商魂」が、SNSで大炎上＝田中康夫

2017年12月12日

Texts by サンデー毎日



設置された「世界一のクリスマスツリー」の前でポーズを取る関係者ら＝神戸市中央区で2017年11月17日午前9時37分、山崎一輝撮影

被災地・神戸の「復興と再生」を謳(うた)い、富山県氷見市の巨木をメリケンパークに移植した「世界一のクリスマスツリー」に批判が集まっている。建前とは裏腹な「商魂」が人々に見抜かれた感もあるが、この問題が浮き彫りにしたものは何か？ 田中康夫氏が読み解く。

「輝け、いのちの樹。めざせ！ 世界一のクリスマスツリープロジェクト」と銘打って神戸市のメリケンパークで開催中(12月2日～26日)のイベントが“耳目(じもく)”を集めています。

「NYのロックフェラーセンターのクリスマスツリーよりも大きな生木のツリーをメリケンパークに飾るプロジェクトが西畠清順(にしはたせいじゅん)の総合プロデュースで始動。富山県氷見(ひみ)で発見された推定樹齢150年の『あすなるの木』を海陸1000キロ以上運ぶ史上最大の樹木輸送プロジェクト！ 復興と再生の象徴として未来へ希望のメッセージを送ります」

その「口上書き」は、「メディア」と呼ばれるTV等の領域では総じて「肯定的」に、「SNS」と呼ばれるインターネットの領域では極めて「否定的」に捉えられました。洋の東西を問わず、「経済的新自由主義」という昨今の経済政策が、「供給側＝サプライサイド」と「需要側＝ディマンドサイド」で真逆(まぎやく)な評価を受けているのと相似形です。

ツリーがモミでなくアスナロなのはご愛敬(あいきょう)としても、この企画は“紛(まが)い物(もの)”だと僕は直感。「YouTube」に自分の考えを述べた複数の動画を投稿。「メディア」の記事、「SNS」の発言へのリンクもHP上に設営。「これって無慈悲なア

フリカのライオン・ハンティングと同じだよ！『意識高い系』糸井重里&ほぼ日刊イトイ新聞が、三百代言な『プラントハンター』西畠清順と一芝居打った『被災地』K O B EのX m a s ツリー狂騒曲」のタイトルと共に。

「プラントハンター」を名乗る西畠は「150年続く花と植木の卸問屋『花宇』の五代目」。兵庫県川西市で生まれ育ち、「ひとの心に植物を植える」為(ため)に「日本全国、世界数十カ国を旅し、収集している植物は数千種類。国内外含め、多数の企業、団体、行政機関、プロの植物業者等からの依頼に応え、さまざまなプロジェクトを各地で展開、反響を呼んでいる」と自らアピールする「そら植物園(株)代表取締役社長」です。

WEB上で糸井が主宰する「ほぼ日刊イトイ新聞」(「ほぼ日」)は、「近くで山火事があったときも、この木だけは燃えずに残った奇跡の木だからこそ、神戸という復興と再生の都市に運ぶことでなにかを感じてもらえる」と全面支援。「ロケット輸送で使う『特殊トレーラー』に載せ、氷見の山中から陸上輸送。伏木富山港で巨大船に運び込み、日本海から瀬戸内海を経て神戸港に到着」した全長31メートル、総重量24トンの木をクレーンで「移植」する迄(まで)の全行程を時々刻々、詳細に報じました。

「ほ～ら、初冬に神戸に～♪ 見に見に見に来て～ね」と糸井が自ら告知(ツイート)した「世界一のクリスマスツリー」の植樹式。NHKもヘリコプターを飛ばして「おはよう日本」、「あさイチ」の両番組で生中継を敢行。

が、好事魔多(こうじまおお)し。79年前の昭和13年に1500戸余りが大火で焼失した氷見の中心街からは8キロも離れた山中に群生していた、樹高から推察するに樹齢250年を優に超える樹木の1本を、神戸開港150周年と「符節(ふせつ)」を合わせて樹齢150年の「奇跡の木」と虚偽告知(フェイクニュース)したのでは、とSNS上で疑念が示されまです。皮肉にも「ほぼ日」が掲載した写真で判読されたのでした。

## 真っ当な「意識高い系」はどっち？

而(しか)も移植先は「海水液状化土壌」のメリケンパーク。根腐れ必至です。すると、「ヒノキになりたくてもなれない『落ちこぼれの木』が脚光を浴びて世界一！」と高言していた西畠は更に巧弁。「寿命を終えた特別な木」はメモリアルバungalow(うでわ)として「再生」。1個3800円で通販しますと。

「鎮魂」「復興」を大義名分に、植物の命を弄(もてあそ)ぶ「商魂」そのものと批判が噴出。「究極のエゴは大衆も満足させる」と嘯(うそぶ)き、“ゾッキ本”が自慢の「TSUTAYA図書館」を全国で増殖する増田宗昭が率いるカルチュア・コンビニエンス・クラブと並んで、主催の神戸市と共に実行委員会に参画していた、神戸が本社の通信販売会社フェリシモは販売中止に追い込まれました。

すると西畠は、北野異人館街よりも浜(はま)っ側(かわ)に位置する生田神社の「鳥居」としてサステナブル(持続可能)に有効活用します、と大胆不敵に基督(キリスト)教と神道の

「止揚(アウフヘーベン)」も企(たくら)む後出しジャンケン。挙げ句、「見るのが嫌な人は見なければいい」と『神戸新聞』で逆ギレ発言。何とも香ばしい燃料を投下し続けるサステナブルな御仁です。

他方、その彼を全面支援していた筈(はず)の上場企業「(株)ほぼ日」代表取締役社長は、以下の呟き(ツイート)以降は沈黙しています。「冷笑的な人たちは、たのしそうな人や、元気な人、希望を持っている人を見ると、じぶんの低さのところまで引きずり降ろそうとする。じぶんは、そこまでのぼる方法を持っていないからね」と。

併せて、阪神間在住の女性の呟きも載録を。“上から目線”な「供給側」より市井(しせい)に生きる「需要側」の方が遥(はる)かに真っ当な「意識高い系」だと知らしめたのが、今回のイベントの「成果」と得心するでしょう。

「各所で起きた火災が燃え広がり、街が黒い炭になるのを人間が見てるしかなかった光景を、映像であれ実際にであれ覚えてる人は……大木を故郷の地から引き離し、僅かな期間だけ飾って切り刻むことに『鎮魂』を結び付けられても違和感しか感じない」と。

鶴越(ひよどりごえ)の源平合戦、楠木正成の湊川(みなとがわ)合戦以降、絶えて歴史教科書に登場しなかった農山漁村・神戸は慶応4年＝1868年に貿易港へ突如変身。富国強兵の造船所や製鋼所に人々が九州や沖縄、朝鮮半島から民族移動。その明治初期、牧野富太郎が慨歎(がいたん)する程の乱伐(らんぱつ)で六甲山は惨憺(さんたん)たる状況。複数回の大水害に見舞われ、広葉樹を中心とする理想的な針広混交林(しんこうこんこうりん)へと緑化を推進。六甲山の現在の風光は、お金の換算し得ぬK O B Eの財産。

二百歩譲って海端にツリーを望むなら、六甲山中の老木を「移動」させ、その最期を「地産地消」で愛(め)でてこそ「高度消費社会」を牽引(けんいん)した「意識高い系」の面目躍如(めいもくえつじょ)だったでありましょうに。

(文中敬称略)

(田中康夫)

---

## 田中康夫 (たなか・やすお)

1956年生まれ。作家。元長野県知事。著書に『33年後のなんとなく、クリスタル』ほか。<http://tanakayasuo.me>